

V) 病害虫発生経過の概要及び発生原因の解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	苗立枯病	平年並	平年並	4月中旬から県下各地で発生がみられたが、平年並みであった。主な病原菌はトリコデルマ菌、フザリウム菌であった。	育苗期間の気温が高く経過し、また薬剤防除の徹底等により平年並みになったものと考えられる。	育苗箱での薬剤の土壌混和、灌注が行われた。
	苗いもち	平年並	多い	全般の発生量は平年に比べて多かった。	前年の穂いもちの発生量が多かったことから、汚染種子の割合が高く、発生が助長されたものと考えられる。	発生に応じて薬剤による防除が行われた。
	葉いもち	早い	多い	初発生は6月2日、全般発生は平年に比べて早く6月第3半旬で、初期の病勢は活発に推移した。県東部では6月下旬に発生圃場率、発病株率ともに平年を大きく上回り、広範囲に葉いもちの発生をみた。その後、7月第3半旬の梅雨明け後、高温少雨傾向となり、病勢はやや鈍化したが、直ちに終息することなく、全般の発生量は平年に比べて多くなった。	前年の多発生により汚染種子の割合が高くなったことで、苗いもちが県下各地で発生し、罹病苗の本田への持ち込みも目立った。置き苗での多発生等の理由により、本田初期の発生は早く、且つやや多くなった。6月第3半旬～7月第2半旬にBLASTAMによる感染好適日が断続的に出現し、病勢が急速に進展した。	常習発生地域では、育苗箱施薬や粒剤の本田散布が行われた。発生圃場を中心に、粉剤、液剤散布が行われた。6月10日には臨時情報を、7月1日には、葉いもちとしては6年ぶりに注意報を発表した。
	穂いもち	やや早い	やや多い	主要品種のコシヒカリでは県西部の中山間部を中心に多発生圃場がみられ、全体の発生量は平年に比べてやや多かった。ただし、発病程度の高い圃場の割合は比較的に低かった。	葉いもちの発生が多く伝染源量は多かった。しかし、出穂期以降、気温がやや高く推移したために病勢がやや衰え、この結果、発病程度の高い圃場が少なくなったものと考えられる。	常習発生地域では、育苗箱施薬や本田での粒剤施用が行われた。また、葉いもち発生圃場では、穂ばらみ期、穂揃期に粉剤、液剤による防除が行われた。7月23日に注意報を発表した。
	紋枯病	平年並	やや多い	初発生は平年並みの6月10日に認められた。主要品種コシヒカリでは7月上旬まで発生圃場率、発病株率ともに平年値を下回った。この後、病勢が活発化し、7月下旬には発病程度の高い圃場もみられた。その後も台風被害により倒伏した圃場を中心に発病程度は高くなり、全般の発生量は平年に比べてやや多くなった。	7月中旬以降病勢が活発化したのは気温が高くなり、周期的に降雨があったことで湿度も確保され、上位進展に好適な気象条件となったことによると考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じて出穂期までに薬剤散布が行われた。
	白葉枯病	—	平年並	作期の遅い品種を中心に発生が見られ、全般の発生量は平年並みであった。	作期の遅い品種では9月に上陸、接近した二つの台風による暴風雨や前線の活発化により発生が助長されたものと考えられる。	常習発生地の一部で薬剤散布が行われた。
	馬鹿苗病	平年並	少ない	全般の発生量は平年に比べて少なかった。	種子の保菌率が低かったことや、種子消毒が徹底したことなどにより発生が抑制されたものと考えられる。	専用の種子消毒器を用いた吹き付け処理を中心とした種子消毒が行われた。
	ごま葉枯病	平年並	やや少ない	県下各地で発生がみられたが、葉身の発病、穂枯れとも発生量は平年に比べてやや少なかった。	出穂期に降雨が少なく、感染がやや抑制されたものと考えられる。	穂いもちとの同時防除として薬剤散布が行われた。
	すじ葉枯病	平年並	やや少ない	県下各地で発生がみられたが、発生量は平年に比べてやや少なかった。	二次伝染が活発化する出穂期以降、降雨が少なかったことにより感染がやや抑制されたものと考えられる。	穂いもちとの同時防除として薬剤散布が行われた。
	黄化萎縮病	平年並	少ない	常発地の一部で僅かに発生が認められ、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	生育前半の感受性が高い時期に浸感水がなく、感染機会が少なかったため、発生が抑制されたものと考えられる。	常発地の一部で薬剤防除が実施された。
	縞葉枯病	平年並	少ない	県内の一部で発生がみられた。	媒介虫であるヒメトビウンカの発生量が少なかったことに加え、近年本病の発生が少なく保毒虫率も低いと推察されることから、少発生になったものと考えられる。	特に防除は行われなかった。
	萎縮病	平年並	少ない	県内の一部で発生がみられた。	近年、本病の発生が少なく、保毒虫率が低いと考えられるため、少発生となったものと考えられる。	特に防除は行われなかった。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	黄萎病	—	—	生育期間、再生稲とも発生を確認することはできなかった。	—	—
	籾枯細菌病	平年並	やや少ない	本田での発生は平年に比べてやや少なかった。	出穂期前後の気温は高かったが、降水量は少なく感染には抑制的であったと考えられる。	採取圃場では、出穂期を中心に薬剤散布が行われた。
	ヒメビウカ	平年並	やや少ない	5～6月下旬の払い落とし調査では、虫数、発生圃場率ともに低く、全般の発生量も平年に比べてやや少なく経過した。	越冬量の減少とウンカ類との同時防除で発生が抑制されたと考えられる。	ウンカ類、カメムシ類との同時防除が行われた。
	ツマグロヨコバイ	平年並	やや多い	第1世代成虫の発生時期は平年並であった。払い落とし調査では6月までは発生虫数、圃場率とも平年に比べて少なかったが、7月以降は発生量が増加し、一部では多発生の圃場が見られた。	越冬量が少なかったため前半の発生量は少なかったが、全般に気温がやや高く推移したために圃場での増殖が盛んとなった。この結果、収穫期には発生程度の高い圃場が多くなったと考えられる。	ウンカ類、カメムシ類との同時防除が行われた。
	ニカメイチュウ 第1世代 第2世代	やや早い やや早い	平年並 やや少ない	予察灯及びフェロモントラップにおける発蛾最盛期は、第1世代成虫が5月中下旬、第2世代成虫が7月下旬で平年に比べてやや早く、誘殺数は第1世代は平年並み、第2世代はやや少なかった。圃場における被害は第1世代は平年並み、第2世代はやや少なかった。	前年の発生から、越冬量はやや多く、また春先から気温が高く各世代の発生も早まったが、箱施薬などの防除対策が行われたため、被害は抑えられたものと考えられる。	常習発生地では薬剤散布が行われた。
	イネズミゾウムシ	やや早い	平年並	予察灯における越冬世代成虫の初誘殺は、平年に比べてやや早い4月第4半旬に認められ、誘殺数はやや多かった。5月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害株率とも平年並であった。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、幼虫による被害は抑えられたものと考えられる。	育苗箱施薬が行われた。多発田では本田防除が行われた。
	セジロウンカ	平年並	少ない	予察灯での初飛来は平年並みの6月下旬から見られたが、6～7月の飛来量は少なく平年比1～7%であった。これに由来する幼虫は7月下旬から発生したが、発生量は平年に比べて少なかった。	飛来量が平年に比べて少なく、圃場での発生も出穂時まで少なく、被害は抑えられたものと考えられる。	いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	トビイロウンカ	—	少ない	予察灯及び巡回調査においてトビイロウンカの発生は認められなかった。	飛来量が平年に比べて少なかった。	
	コブノメイガ	平年並	平年並	予察灯での飛来時期は平年並みであったが、飛来量は平年に比べて少なかった。次世代の発蛾盛期は平年に比べて遅く8月第3半旬であった。被害株率、発生圃場率はほぼ平年並みであった。	飛来量は少なく、次世代発蛾盛期には、大部分の水稻は出穂しており、その後の被害発生は少なかったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	斑点米カメムシ類	平年並	やや多い	畦畔雑草すくい取り調査（6月下旬）、極早生品種出穂時調査（7月下旬）、コシヒカリ出穂時調査（8月上旬）とも、平年に比べてやや多い発生が認められた。発生種はアカスジカスミカメが多く、ついでホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシであった。	生育期間の気温が高く、降水量も少ないなど好適な条件が続き、発生量は平年に比べて増加したと考えられる。	7月15日付けで注意報を発表し、草刈りなどの圃場管理の徹底や、発生に応じて穂揃い・乳熟期～糊熟期に薬剤散布が行われた。
	イネトオイトムシ	平年並	やや少ない	5月下旬における本虫の被害は平年に比べてやや少なかった。6月下旬には山間部を中心に発生圃場が認められた。	春先からの高温、寡雨傾向で、発生に不適な気象条件が続いたためと考えられる。	育苗箱施薬のほか、多発生圃場では本田散布も行われた。
	イネツトムシ	平年並	やや少ない	第1、第2世代幼虫による被害は、平年に比べてやや少なかった。	—	多発生圃場では薬剤防除が行われた。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	アワヨトウ	平年並	やや少ない	予察灯での成虫の誘殺数は平年に比べて少なく、圃場での幼虫による被害は平年に比べてやや少なかった。	—	特に薬剤防除は行われなかった。
	イネゾウムシ	—	少ない	飛来は確認されなかった。	—	特に薬剤防除は行われなかった。
	アワヨトウ	平年並	やや少ない	越冬世代成虫による葉の被害量は平年に比べてやや少なかった。	—	イネミズゾウムシとの同時防除として育苗箱施薬が行われた。
ムギ	小さび病	平年並	平年並	5月中旬から発生がみられるようになった。全般の発生量は平年並みであった。	—	とくに防除は行われなかった。
	赤さび病	平年並	平年並	5月中旬から発生がみられるようになった。全般の発生量は平年並みであった。	—	とくに防除は行われなかった。
	黄さび病	—	—	発生を確認することはできなかった。	近年発生は全くみられない。	—
	黒さび病	—	—	発生を確認することはできなかった。	近年発生は全くみられない。	—
	うどんこ病	—	少ない	全般の発生量は平年に比べて少なかった。	近年発生量が少なく、菌密度が低下しているものと考えられる。	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
	赤かび病	平年並	やや少ない	一部地域では発病程度のやや高い圃場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	出穂期に降雨がやや少なかったため、感染が抑制されたものと考えられる。	開花期（オオムギは穂揃期）とその10日後に薬剤防除が行われた。
ダイズ	紫斑病	平年並	平年並	収穫子実における発生量は平年並みであった。	開花期～結実期にかけて降雨が少なく、前期感染量は抑制されたが、後半は一転して降雨量はやや多くなったため、収穫子実における発生量は平年並みになったものと考えられる。	一部の圃場で薬剤散布が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は7月まで累積誘殺数がやや多かったが、その後飛来量が多くなり、9月末には平年の1.8～2.0倍と多かった。圃場での白変葉の発生はやや早く、8月上旬から認められた。白変葉数は平年並みであったが、発生圃場率が高く、全般の発生量はやや多かった。	成虫の飛来量が多かったため、8月の寄生密度は多かったものと考えられる。その後、薬剤による防除が行われたことや、9月の降水量が多かったことなどから発生量はやや多い程度に抑えられたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。9月1日には注意報を発表した。
ナシ	黒斑病	やや遅い	やや少ない	初発生は5月7日で平年よりやや遅かった。病勢は全般に緩慢であり、発生量は、平年よりやや少なかった。	6月上旬の袋がけ期に降水量は少なく、発生には抑制的であり、平年よりやや少なくなったものと考えられる。	袋がけ時期を中心に薬剤散布がよく行われた。以後、収穫期まで薬剤散布が行われた。
	黒星病	平年並	平年並	発生時期は平年並みであった。発生量は5月上旬から下旬にかけてやや多かったが、その後天候が回復したため、平年並みとなった。	5月の発生はやや多かったが、6月上旬の袋がけ期に降水量は少なく、発病は抑制された。また、防除効果の高い薬剤が適期に散布され、平年並みになったものと考えられる。	開花期から袋かけ期を中心に防除が行われた。
	赤星病	平年並	やや少ない	初発生は4月20日で平年並みであった。全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	冬孢子堆の100%成熟日は平年より早く3月31日であったが、3月下旬から4月中旬までの降水量が平年より少なかったため発生は抑制されたものと考えられる。	開花期を中心に防除が行われた。
	ハダニ類	平年並	やや多い	ハダニ類の発生量は当初やや少なかったが6月下旬以降8月下旬まで増加し、全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	カンザワハダニの越冬量はやや少なく、生育初期の発生量はやや少なかった。しかし、6月中下旬以降は気温が高く、降水量は少なく経過し、増殖に好適な条件が続いたため発生量はやや多くなった。	5月下旬～6月、7月上旬、8月上旬を中心に薬剤散布が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ナシ	モシクイ	やや早い	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期はやや早く、誘殺数はやや多かった。果実の被害は平年並みであった。	前年の発生がやや多く、越冬世代成虫の発生量がやや多かったと考えられる。また、4月中旬から5月の気温は全般に高く、発生が平年よりやや早くなったと考えられる。しかし、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	ナシヒメシクイ、ハマキムシ類との同時防除が行われた。
	ナヒメシクイ	やや早い	やや多い	フェロモントラップでの各世代成虫の誘殺時期はすべての世代ではやや早く、各世代の誘殺数はいずれも平年に比べやや多かった。果実の被害は平年並みであった。	3月中旬以降気温が高く、越冬世代成虫の発生時期はやや早かった。越冬量もやや多かったことから、各世代の発生量もやや多くなったものと思われる。しかし、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	小袋掛け前に他害虫との同時防除が行われた。
	アブラムシ類	やや早い	やや多い	4月下旬の寄生梢率、寄生程度は高かったが、6月下旬には寄生新梢率、寄生程度ともほぼ平年並みとなった。全般の発生量はやや多かった。	4月上旬が高温に経過したため、初期の発生量はやや多かった。6月中旬は高温で経過したが、薬剤散布の影響もあり平年並みとなり、全般の発生量もやや多かったと考えられる。	5～6月に薬剤散布が行われた。
	ハマキムシ類	やや早い	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、やや早かった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害はやや少なかった。	3月上旬から4月下旬にかけて気温が高く、越冬世代の発生時期はやや早くなったと考えられる。5月以降も高温に経過し、第1世代以降の発生も早くなったと考えられる。	他害虫との同時防除が行われた。
	クロカカガラムシ	—	少ない	全般の発生量は少ない。	—	防虫果袋が使用された。
ブドウ	晩腐病	平年並	やや少ない	7月に入り、巨峰、ピオーネ等の大粒種を中心に発生が見られたが、病勢は比較的緩慢で、発生量は平年よりやや少なかった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布され、平年よりやや少なくなったものと考えられる。	他病害との同時防除が行われた。
	さび病	—	—	発生は確認できなかった。	6～7月に降水量が少なく、発生が抑制された。	他病害との同時防除が行われた。
	褐斑病	平年並	やや多い	6月下旬に初発を確認した。発生量は平年よりやや多かった。	近年発生量が多く、越冬菌量が多かったと考えられる。また、栽培を行われていない放任園での発生が非常に多く見られ、周辺の伝染源となったと考えられる。	他病害との同時防除が行われた。
	べと病	平年並	やや少ない	露地栽培のデラウェアでは6月中旬に初発を確認した。発生量は平年よりやや少なかった。	6、7月に降水量が少なく、発生が抑制された。	露地栽培を中心に薬剤防除が行われた。なお、施設栽培ではビニル被覆除去後行われた。
	黒とう病	平年並	少ない	露地のピオーネで発生が見られたが、全般の発生量は平年より少なかった。	—	露地栽培を中心に薬剤防除が行われた。
	灰色かび病	平年並	やや多い	早期、普通加温のデラウェアを中心に発生がみられた。発生はやや多かった。	5月～6月上旬の降水量が多かったために、発生が助長された。	発生に応じて薬剤散布が行なわれた。
	チャノキアザミマ	平年並	多い	ハウス栽培デラウェアの圃場で4月下旬に発生が認められた。5月下旬以降増加し、発生量が平年に比べ多くなった。	4月下旬の初発生は昨年11～12月の気温が高く、園内で越冬した個体が多かったためと考えられる。露地園に設置した粘着トラップでの誘殺数はやや少なく推移しており、ハウスデラウェア園への侵入は多くはなかったと考えられるが5月下旬以降ハウス内の気温は増殖に好適であったため、発生量が多くなったと考えられる。	開花期から幼果期に薬剤散布が行われた。
	ハダニ類	やや早い	やや多い	4月下旬から発生が認められ、5月下旬以降やや多くなった。発生量は6月下旬以降やや多くなった。一部の圃場で葉の黄化、早期落葉が認められた。全体の発生量はやや多かった。	薬剤散布は、汚染、花粉の溶脱のため初期以外にほとんど行われないことから、ハウス内の気温が好適になるとともに増殖が盛んとなったものと考えられる。	—

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ブドウ	ブドウカミキリ	平年並	やや少ない	露地栽培ブドウでの枝折れ発生時期、被害枝からの脱出時期とも平年並みであった。	—	ビニル被覆前後に薬剤散布が行われた。
	フタテンヒメヨコバイ	平年並	平年並	無加温ハウス栽培ブドウでは平年並みの5月下旬から発生が見られ始めた。発生量は初めやや少なく推移したが、収穫終了後の8月以降やや多くなったが全般の発生量は平年並みとなった。	越冬量が平年並みであったことと、チャノキイロアザミウマとの同時防除が徹底し、収穫期までは発生量がやや少なかったが、収穫後は防除が行われなかったためやや多くなった。	チャノキイロアザミウマと同時防除が行われた。
	チャノコカクモンハマキ	やや早い	平年並	フェロモントラップでのチャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、やや早かった。チャノコカクモンハマキの発生量は平年並みで、幼虫による被害はやや少なかった。	3月上旬から4月下旬にかけて気温が高く、越冬世代の発生時期はやや早くなったと考えられる。5月以降も高温に経過し、第1世代以降の発生も早くなったと考えられる。	一部の園では薬剤散布が行われた。
カキ	炭疽病	平年並	平年並	果実での発生は6月下旬から一部圃場で見られた。発生量は9月に入りやや増加したものの平年並みであった。	—	一部に無防除や薬剤散布の遅れた園が見られた。
	うどんこ病	やや早い	平年並	6月下旬に初発を確認した。その後、県下各地で発生が認められた。発生量は8月まではやや少なく推移したものの、9月にやや増加し、平年並みとなった。	9月は降水量が多く、発生が助長されたと考えられる。	薬剤散布の回数の少ない園や散布の遅れた園も見られたが、全般には適切な防除がなされた。
	円星落葉病	平年並	平年並	8月下旬から発生が見られ、一部多発園も見られたが、全般の発生量は平年並みだった。	全般的に降水量が多かったものの、防除の徹底により、発生量は平年並みであったと考えられる。	感染時期を中心に薬剤散布が行われた。
	黒星病	平年並	平年並	5月より発生が見られた。全般の発生量は平年並みだった。	全般的に降水量が多かったものの、防除の徹底により、発生量は平年並みであったと考えられる。	感染時期を中心に薬剤散布が行われた。
	灰色かび病	平年並	やや多い	4月下旬から発生を確認した。全般の発生量はやや多かった。	4月下旬から5月は風の強い日と降水量が多く、発生が助長されたものと考えられる。	4月末から5月にかけて薬剤散布が行われた。
	カキミガ	平年並	平年並	果実の被害は一部で多発圃場が認められたが、全般の発生量は平年並みであった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布されたためと考えられる。	各世代発生期に薬剤散布が行われた。
	カキタアザミウマ	平年並	平年並	4月26日に被害捲葉の発生を認めた。発生量は平年並みであった。第1世代成虫は6月第2半旬から粘着トラップに誘殺され、誘殺数は平年に比べてやや少なかった。果実被害は7月中旬から見られたが、被害量はやや少なかった。	越冬成虫の飛来量が平年並みであったこと、成虫飛来時期の薬剤散布と被害捲葉の除去などの防除対策により、果実被害の発生量が少なかったと考えられる。	越冬成虫飛来期の薬剤散布と捲葉の切除が行われた。
	カメムシ類	早い	多い	フェロモントラップでは4月18日に、予察灯では4月22日から誘殺された。5月中旬以降の誘殺数は平年より多く推移した。6月第4半旬以降フェロモントラップおよび予察灯の誘殺数が急激に増加し、それ以降8月第4半旬まで平年より多く推移した。それ以降減少し、平年並からやや少なく推移した。	昨年ヒノキ毬果が多く、暖冬であったため越冬量が多かった。また、本年はヒノキ毬果量が少なく7月早くから果樹園への飛来が認められたと考えられる。9月以降は夜温も下がり飛来量も少なくなったと考えられる。	7月中旬以降8月下旬まで定期的に薬剤による防除が行われた。5月10日には臨時情報を、7月1日には注意報を発表した。
春夏メロン	べと病	—	少ない	全般の発生量は平年に比べて少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	つる割病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	罹病性品種に替わって抵抗性品種が導入され、発生は罹病性品種を栽培する一部に限られる。	罹病性品種を栽培する常発地の一部では、土壌消毒が行われた。
	つる枯病	—	平年並	5月下旬では発生量はやや少なかったが、その後発生量がやや増加し6月下旬では平年並みの発生量となった。	—	薬剤による防除が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
春夏メロン	えそ斑点病	—	平年並	県下各地で発生が見られ、全般の発生量は平年並であった。	—	常発地では薬剤による土壌消毒が行われた。
	黒点根腐病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	常発地では薬剤による土壌消毒が行われた。
	モザイク病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	アブラムシ類に対する薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	春作では5月から発生が見られた。発生量は全般に平年並に推移した。	本圃へのアブラムシ類の持ち込み量は平年並であった。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
	ハダニ類	—	平年並	春作では5月から発生が見られた。発生量は初期にはやや多かったが、その後は平年並に推移した。全般の発生量は平年並であった。	薬剤により発生が押さえられたと推定される	発生に応じて薬剤散布が行われた。
秋冬ダイコン	モザイク病	—	平年並	9月下旬の発生量はやや少なかったが、10月下旬になって発生量が高まり、全般の発生量は平年並であった。	—	アブラムシ類に対する薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	発生量は全般的に平年並みであった。	黄色水盤へのアブラムシ類有翅虫の飛来数は8月が平年並み、9月がやや多かった。本年はハスモンヨトウの発生が多く、薬剤散布の回数が多く行われたため、平年並みの発生になったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
秋冬ハクサイ	白斑病	—	やや多い	全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	9～10月の降水量が多く、発生が助長されたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	軟腐病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	ハスモンヨトウも含め、薬剤による防除が行われた。
	黒斑病	—	やや少ない	発生圃場率、株率は少なく推移し、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	薬剤による同時防除が行われた。
	モザイク病	—	平年並	一部の圃場で多発生していたが、全般の発生量は平年並みであった。	—	アブラムシ類に対する薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	発生量は全般的に平年並みであった。	黄色水盤へのアブラムシ類有翅虫の飛来数は8月が平年並み、9月がやや多かった。本年はハスモンヨトウの発生が多く、薬剤散布の回数が多く行われたため、平年並みの発生になったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	コナガ	平年並	平年並	幼虫の発生量は全般にほぼ平年並であった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	モンシロチョウ	—	やや多い	幼虫の発生量は全般的にやや多かった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は7月まで累積誘殺数がやや多かったが、その後飛来量が多くなり、9月末には平年の1.8～2.0倍と多かった。圃場での幼虫の発生は定植直後からみられ、発生量は全般にやや多かった。	成虫の飛来量が多かったため、定植直後の寄生密度は多かったものと考えられる。その後、薬剤による防除が頻繁に行われたことや、9月の降水量が多かったことなどから発生量はやや多い程度に抑えられたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。9月1日には注意報を発表した。
夏秋キャベツ	黒腐病	—	平年並	9月下旬になって発生が見られるようになり、全般の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
夏秋 キャベツ	菌核病	—	多い	9月下旬の発生量はやや少なかったが、10月下旬以降、病勢が活発化し発生量は多くなった。	7～8月は降雨が少なかったが、9～10月の多雨によって発生が助長されたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	株腐病	—	平年並	全般的の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。
	モンシロチョウ	—	やや多い	幼虫の発生量は全般的にやや多かった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	コナガ	平年並	平年並	幼虫の発生量は全般にほぼ平年並であった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	発生量は全般的に平年並みであった。	黄色水盤へのアブラムシ類有翅虫の飛来数は8月が平年並み、9月がやや多かった。本年はハスモンヨトウの発生が多く、薬剤散布の回数が多く行われたため、平年並みの発生になったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は7月まで累積誘殺数がやや多かったが、その後飛来量が多くなり、9月末には平年の1.8～2.0倍と多かった。圃場での幼虫の発生は定植直後からみられ、発生量は全般にやや多かった。	成虫の飛来量が多かったため、定植直後の寄生密度は多かったものと考えられる。その後、薬剤による防除が頻繁に行われたことや、9月の降水量が多かったことなどから発生量はやや多い程度に抑えられたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。9月1日には注意報を発表した。
冬 キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	多発生圃場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	平年並	全般の発生量は平年並だった。	—	薬剤による防除が行われた。
	株腐病	—	平年並	全般の発生量は平年並だった。	—	薬剤による防除が行われた。
	モンシロチョウ	—	やや多い	幼虫の発生量は全般的にやや多かった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	コナガ	平年並	平年並	幼虫の発生量は全般にほぼ平年並であった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	発生量は全般的に平年並みであった。	黄色水盤へのアブラムシ類有翅虫の飛来数は8月が平年並み、9月がやや多かった。本年はハスモンヨトウの発生が多く、薬剤散布の回数が多く行われたため、平年並みの発生になったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は7月まで累積誘殺数がやや多かったが、その後飛来量が多くなり、9月末には平年の1.8～2.0倍と多かった。圃場での幼虫の発生は定植直後からみられ、発生量は全般にやや多かった。	成虫の飛来量が多かったため、定植直後の寄生密度は多かったものと考えられる。その後、薬剤による防除が頻繁に行われたことや、9月の降水量が多かったことなどから発生量はやや多い程度に抑えられたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。9月1日には注意報を発表した。
イチゴ	灰色かび病	—	平年並	発生量は全般的に平年並みであった。	—	薬剤は、うどんこ病防除を中心とした同時防除が行われた。
	うどんこ病	—	やや多い	育苗期の発生量は平年に比べてやや多かった。本圃においては3月から発生が目立ち始め、4、5月の発生量は平年に比べてやや多くなった。	育苗期（前年7～8月）は低温寡日照であり、発生が助長されたものと考えられる。また、5月は降水量が多かったことなどが、発生が多くなったものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	アブラムシ類	—	やや少ない	促成、半促成栽培における発生量は全般にやや少なく推移した。	前年秋期のアブラムシ類有翅虫の飛来数は平年に比べてやや多かったが、本種に卓効の薬剤が使用されたため発生量はやや少なくなったものと考えられる。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イチゴ	ハダニ類	—	平年並	促成、半促成栽培における定植時の発生量は平年並みであった。収穫開始時期からの発生量は全般に平年並みで推移した。	本圃へのハダニ類の持ち込み量は平年並であった。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
タマネギ	べと病	—	多い	越年罹病株の発生圃場率は平年に比べて高く、発生程度の高い圃場も散見された。二次感染も活発で、5月には激発圃場が見られた。全般の発生量は平年に比べて多かった。	近年、発生が顕在化しており、菌密度が高くなっていることが越年罹病株の多発生に関与しているものと推察される。二次感染が活発化したのは5月に降雨日数が多く、最低気温が高くなったためであると考えられる。	3月30日付けで臨時情報を発表し、越年罹病株の抜き取りと薬剤散布の徹底を促した。
	白色疫病	—	平年並	全般の発生量は平年並だった。	—	薬剤による防除が行われた。
	ボトリチス属菌による葉枯れ	—	少ない	3月に僅かに発生が認められた。その後、収穫期まで病勢は活発化することなく推移し、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	育苗期の9～10月に降水量が少なく、苗の発病が抑制されたことで、本田での伝染源量が少なくなり、発生が少なくなったものと考えられる。	薬剤による同時防除が行われた。
	さび病	—	やや多い	一部地域で5月に発生が見られ、全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	ネギで発生がやや多く、伝染源量が多くなったことで発生が助長されたものと考えられる。	本病を対象にした薬剤散布は特に行われなかった。